3　共同研究

円筒土器文化総合研究データベース作成

青森県教育庁文化財保護課　三内丸山遺跡保存活用推進室

1．円筒土器文化総合研究について

平成４年に開始した三内丸山遺跡の大規模な発掘調査より20年、平成14年の『青森県史　別編三内丸山遺跡』刊行から10年を経過した。その後も円筒土器出土遺跡は年々増加しており、円筒土器文化の現状を把握する必要性が生じている。

そこで、三内丸山遺跡保存活用推進室は、新たな遺跡のデータを追加した「円筒土器文化総合研究データベース」を作成することとした。

円筒土器文化の集落遺跡を対象に、悉皆的な報告書の内容確認を行い、集落の時期や遺構・遺物に関する情報を集成する。その情報は、三内丸山遺跡に関する研究に止まらず、縄文時代の遺跡の比較研究や新たな情報発信を行い、縄文文化に対する新たな関心や埋蔵文化財に対する理解を促進する。

対象範囲が広大であることから、各道県の研究者からなる「円筒土器文化総合研究データベース作成プロジェクトチーム」を組織した。検討会を年２～３回開催し、作業内容の報告とデータベース作成及び活用への議論を行った。また、データベース作成については、ＮＰＯ法人「縄文発信の会」の協力を得た。

当初、平成24・25年度の２年計画であったが、平成26年度にもデータベース作成及び検討会を継続し、データの充実と一層の活用を図った。

2．データベース作成について

（１）作成作業と体制

データベースの項目設定、データ内容の確認は、プロジェクトチームと検討を重ねながら作業を進めた。

各遺跡のデータ抽出作業は、当室職員の指示の下、「縄文発信の会」が雇用した作業員２名が、当課所蔵の文献を中心に円筒土器出土が掲載されている各報告書から、各種データを抽出し、表に入力した。入力したデータは定期的に当室職員が確認を行いながら、作業を進行した。

（２）円筒土器データベース作成プロジェクトチーム員

データベースの作成について、専門的な助言及び協力を得るため、円筒土器文化圏の各道県の研究者に依頼し、プロジェクトチームを結成した。各年度のメンバーは以下のとおりである。

平成24年度

青森県　岡田　康博（青森県教育庁文化財保護課）
　　全体作業統括者
　　小笠原　雅行（青森県教育庁文化財保護課埋蔵文化財グループ）

秋田県　小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）
　　嶋影　壮憲（大館市教育委員会 郷土博物館文化財保護係）

岩手県　星　雅之（公益財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

北海道　福田　裕二（函館市教育委員会 生涯学習部文化財課）

三内丸山遺跡保存活用推進室専門職員

平成25年度に追加となったメンバー

青森県　齋藤　岳（青森県埋蔵文化財調査センター）

永瀬　史人（青森県埋蔵文化財調査センター）

北海道　藤原　秀樹（北海道教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課文化財調査グループ）

平成26年度に追加となったメンバー

青森県　茅野　嘉雄（青森県埋蔵文化財調査センター）

平成24年度には６名だったメンバーは、最終年の平成26年度には10名となった。

３．作業内容と成果

（１）平成24年度の作業と成果

各地の円筒土器文化集落の基礎データの抽出・入力を行うため、まず各地の円筒土器出土遺跡の確認作業を行った。

円筒土器文化の中心地域である北海道南部・青森県・秋田県・岩手県では、遺跡台帳掲載の縄文時代前期・中期の遺跡の中から、円筒土器出土遺跡を抽出した。円筒土器文化周縁地である北海道東・北部、南東北・北陸地方については、関連文献掲載の情報より円筒土器出土遺跡を抽出した。

出土遺跡の把握後、各報告書より基本情報（所在地、立地、地形、標高、緯度/経度、出土土器型式、遺跡の時期、遺構の種類、遺物の種類、発掘調査面積）を確認し、一覧表を作成した（表１）。

円筒土器出土遺跡の数は、平成24年度末の時点で、平成14年刊行『青森県史　別編　三内丸山遺跡』での257遺跡から、３倍強の841遺跡が確認され、その分布図を作成した（図１）。

また、円筒土器出土の各遺跡の内容が記された発掘調査報告書や論文等、関連文献の書誌一覧を作成した（表２）。

平成24年度の作業で、より多くの円筒土器出土遺跡を把握し、遺跡の位置情報からその地理的分布を確認することが可能となった。

（２）平成25年度の作業と成果

円筒土器出土遺跡の基礎データ表を利用して、時期ごとの分布図の作成を行った。

これで円筒土器出土遺跡の分布の変遷や南に隣接する大木式土器文化圏との境界付近の様子も捉えることが出来るようになった。

更に、発掘調査事例の多い青森県内の自治体（青森市・八戸市）における、より詳細な遺構データの抽出と入力を行った。円筒土器出土遺跡の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴、土坑墓、埋設土器等の遺構数、時期を報告書等で確認し、入力作業を行った。

中でも時期ごとの竪穴建物跡数の確認は、各地域での円筒土器文化期の集落の動態把握に繋がった（図９・10）。一例を挙げると、青森・八戸両市域共に、縄文時代前期後葉に分散していた小・中規模の集落が、中期中葉になると集落数は減少するものの集約・大規模化が進み、特に青森平野における三内丸山遺跡とその周辺に顕著な傾向が見られた。

（３）平成26年度の作業と成果

円筒土器文化の南に広がった大木式土器文化との時間関係を整理するため、各地で実施された放射性年代測定や両型式の遺構内での共伴事例を集めた。その後、プロジェクトチームと検討を重ねて、北海道から北東北の縄文時代前期・中期の広域編年案を作成した（表３）。さらに、円筒土器文化に特徴的とされる遺物（半円状扁平打製石器・北海道式石冠など）の出土遺跡、時期・数量を確認した。

また、前年度に続き、円筒土器出土遺跡の遺構データを抽出し、ムラを構成する諸施設（竪穴建物跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴、墓、盛土など）の内容を確認した。

円筒土器文化総合研究　集落データベース（青森）

遺跡名	遺跡名（読み）	市町村	所在地	緯度（日本測地系）	経度（日本測地系）	緯度（世界測地系）	経度（世界測地系）	土器型式	早期 前半	早期 後半	前期 前葉	前期 中葉	前期 後葉	中期 前葉	中期 中葉	中期 後葉	後期 前葉	後期 中葉	後期 後葉	晩期 前葉	晩期 中葉	晩期 後葉	遺構	遺物	文献
洗平(2)	あらいだい(2)	おいらせ町	おいらせ町字瓢	40.3654	141.2110	40.3704	141.2058	円筒下層d式、晩期					○							△	△	△	なし		青森県教委2005『三内沢部(3)遺跡・柴山(1)遺跡・洗平(2)遺跡』
ふくべ(4)	ふくべ(4)	おいらせ町	おいらせ町字瓢	40.3627	141.2150	40.3648	141.2144	貝殻文、中期末後期初頭	○							○	○						竪穴遺構、溝状土坑		青森県教委2005『通目木遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡』 おいらせ町教委2007『おいらせ町内遺跡発掘調査報告書1』
向山(4)	むかいやま(4)	おいらせ町	おいらせ町字向山	40.3642	141.2456	40.3654	141.2447	物見台～吹切沢式ほか、早稲田6類、円筒下層d式	○		○		○				△	△	△				土坑、集石遺構、溝状土坑		青森県教委1991『中野平遺跡・向山(4)遺跡』 下田町教委2001『下田町内遺跡発掘調査報告書4』 下田町教委2002『向山(4)遺跡発掘調査報告書』 おいらせ町教委2009『おいらせ町内遺跡発掘調査報告書3』
向山(5)	むかいやま(5)	おいらせ町	おいらせ町字向山	40.3655	141.2427	40.3709	141.2422	前期			△	△	△										溝状土坑		下田町教委2004『下田町内遺跡発掘調査報告書7』
石神	いしがみ	つがる市	森田村大字山田字山崎	40.4632	140.1948	40.4638	140.1936	深郷田式、円筒下層a～d2式、円筒上層a～e式、榎林式、最花式			△	○	○	○	○	○				△	△	△	竪穴住居跡、土坑、土坑墓、配石遺構、埋設土器、道路跡		江坂輝彌1970『石神遺跡』 青森県教委1994a『青森県遺跡詳細分布調査報告書V』 青森県教委1994b『青森県遺跡詳細分布調査報告書6』 森田村教委1997a『石神遺跡』 森田村教委1997b『石神遺跡2』 森田村教委2000『石神遺跡3』 つがる市教委2011『石神遺跡7』
牛潟(1)	うしがた(1)	つがる市	車力村	40.5621	140.2113	40.5634	140.2107	円筒下層式・中期			△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	住居跡、土坑・フラスコ状土坑、柱穴、地床炉		車力村教委1990『牛潟(1)遺跡発掘調査概報1』 車力村教委 1991『牛潟(1)遺跡発掘調査概報2』 車力村教委1994『牛潟(1)遺跡発掘調査概報3』 車力村教委1995『牛潟(1)遺跡発掘調査概報4』 つがる市教委2010『牛潟(1)遺跡5』
牛潟(2)	うしがた(2)	つがる市	つがる市牛潟町鷲野沢	40.5621/40.5623	140.2117/140.2115	40.5630	140.2116	円筒上層	○	○	○	○	○	○			△	△	△				土坑墓、土坑・フラスコ状土坑、道路跡、竪穴住居跡、ピット		車力村教委2004『牛潟(2)遺跡試掘調査報告書』 車力村教委2005『牛潟(2)遺跡』 つがる市教委2009『牛潟(2)遺跡3』
亀ヶ岡	かめがおか	つがる市	木造町大字亀ヶ岡字亀山			40.5301	140.2004	円筒下層d式、円筒上層a式、円筒上層d式					△	△	△	△	△	△	○	○	○	○	なし		つがる市教委2010『田小屋野貝塚2・亀ヶ岡遺跡4・上沢辺(2)遺跡』
清水	しみず	つがる市	車力村富萢字屏風山	41.0109	140.2052	41.0014	140.2022	前期末、中期中頃、十腰内I					○		○		○						土坑		青森県教委2002『清水遺跡』
田小屋野貝塚	たごやのかいづか	つがる市	木造町館岡字田小屋野			40.5317	140.1945	円筒下層a・b・d式、円筒上層a・c・d式、最花式、深郷田式			○	○	○	○	○	○							竪穴住居跡、土坑、ピット		青森県立郷土館1995『木造町田小屋野貝塚』 木造町教委2000『広岡溜池遺跡試掘調査報告書』
玉井(1)	たまい(1)	つがる市	森田村大字森田字玉井	40.4620	140.2141	40.4624	140.2125	円筒下層b・d1式、円筒上層a・b・d式、大木系				○	○	○	○	○	○	○					土坑、配石遺構、柱穴、竪穴住居跡		森田村教委1994『玉井(1)遺跡(試掘調査概報)』 森田村教委1996『玉井(1)遺跡(本格調査)』
鶴喰(9)	つるばみ(9)	つがる市	青森県西津軽郡森田村大字床舞字鶴喰101-2ほか	40.4553	140.1908	40.4608	140.1848	円筒上層式、下層c・d2式	○					△	△		○						土坑、配石遺構		青森県教委1992『鳴沢遺跡・鶴喰(9)遺跡』 森田村教委2003『八重菊(1)遺跡3・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』
鶴喰(8)	つるばみ(8)	つがる市	森田村床舞字鶴喰	40.4608	140.1922	40.4606	140.1925	前期、中期、後期初頭			△	△	△	△	△	△	○						土坑?		青森県教委1995『青森県遺跡詳細分布調査報告書7』
鶴喰(6)	つるばみ(6)	つがる市	森田村大字床舞字鶴喰53-3、56-15	40.4617	140.1838	40.4617	140.1838	早・前・中・後・晩期	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	配石遺構、フラスコ状土坑、土坑		森田村教委2003『八重菊(1)遺跡3・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』
筒木坂屏風山	どうぎざかびょうぶざん	つがる市	木造町筒木坂字屏風山	40.5326	140.1953	40.5326	140.1953	縄文中期～後期						△	△	△	△	△	△				土坑・フラスコ状土坑、焼土、ピット		青森県教委2004『青森県遺跡詳細分布調査報告書16』
花林	はなばやし	つがる市	車力村大字車力村花林2-1	40.5600	140.2100	40.5645	140.2124	前期			△	△	△										竪穴住居跡		車力村教委2002『花林遺跡』
屏風山西	びょうぶさんにし	つがる市	森田村大字森田字駒ヶ渕地内	40.4628付近	140.205付近	40.4638	140.1949	円筒、榎林式(前・中期)			△	△	△	△	△	△							土坑		森田村教委2001『屏風山西遺跡・豊原(2)遺跡 』
広岡溜池	ひろおかためいけ	つがる市	木造町大字越水字屏風山1-79	40.4701	140.1725	40.4722	140.1714	円筒下層a.b.d1式、円筒上層a.b式、大木系			△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	竪穴住居跡、土坑、溝跡、焼土遺構		木造町教委2000『広岡溜池遺跡試掘調査報告書』
八重菊(1)	やえぎく(1)	つがる市	森田村大字大館字八重菊24-233	40.4627	140.1826	40.4628	140.1827	円筒下層式、榎林式、最花式	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	フラスコ状土坑		森田村教委2001『八重菊(1)遺跡』 森田村教委2002『八重菊(1)遺跡2』 森田村教委2003『八重菊(1)遺跡3・鶴喰(6)遺跡・鶴喰(9)遺跡』
赤川	あかがわ	むつ市	むつ市大畑町大畑赤川			41.2707	141.0659	円筒下層式																	角田文衛1939「陸奥榎林遺跡の研究」『考古学論叢』10
大湊近川	おおみなとちかがわ	むつ市	むつ市大湊浜町	なし		41.1648	141.0919	早稲田6類、円筒下層a・b・d1・d2式、円筒上層a2・c・d・e式、榎林式、最花式、大木10式併行、後期前葉、後期中葉、後期後葉、晩期初頭、晩			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	竪穴住居跡、土坑、フラスコ状土坑、石囲炉、焼土遺構、土壙墓、集石		青森県教委1987『大湊近川遺跡発掘調査報告書』
女館(1)貝塚	おんなだて(1)かいづか	むつ市	むつ市田名部字女舘			41.1843	141.1295	円筒下層c・d式																	江坂輝弥1955「青森県女館貝塚発掘調査報告」『石器時代』2 橘善光1972「女館貝塚の縄文前期初頭の土器」『うとう』77
貝崎	かいざき	むつ市	むつ市脇野沢脇野沢九艘泊			41.0848	140.4604	円筒下層b～d式																	脇野沢村教委1984『貝崎遺跡発掘調査報告書』
金谷貝塚	かねやかいづか	むつ市	むつ市金谷/金谷1丁目			41.1737	141.1158																		橘善光・奈良正義1977「金谷貝塚調査報告」『むつ市文化財調査報告』3 橘善光1978「金谷貝塚」『日本考古学年報』29
葛沢	くずさわ	むつ市	むつ市川内町川内家ノ上			41.1156	140.5819	円筒下層式																	
小サ沢	こささわ	むつ市	むつ市脇野沢小沢小サ沢			41.1004	140.5219	円筒下層式																	
最花貝塚	さいばなかいづか	むつ市	むつ市大字田名部字土手内			41.1746	141.1501	白浜式、円筒下層式円筒上層a1・d・e式、最花式、中期末～後期初頭、十腰内Ｉ式	○			△	△	○	○	○	○						貝塚		大塚彌之助1936「青森県下北郡最花の貝塚」『地質学雑誌』XLⅢ－511 江坂輝弥1958「余白録-古いノートから-青森県下北半島最花貝塚の調査日誌より」『石器時代』5 金子浩昌1967「下北半島における縄文時代の狩猟活動」『下北-自然・文化・社会』九学会連合下北調査委員会 江坂輝弥1969「青森県むつ市最花貝塚」『日本考古学年報』17 金子浩昌・牛沢百合子・橘　善光・奈良正義1978「最花貝塚第1次調査報告」『むつ市文化財調査報告』4 橘　善光1979「最花貝塚」『日本考古学年報』30 橘　善光1980「最花貝塚」『日本考古学年報』31 橘　善光・奈良正義1980「最花貝塚第2次調査報告」『むつ市文化財調査報告』6 金子浩昌・橘　善光・奈良正義1983「最花貝塚第3次調査報告」『むつ市文化財調査報告』9 橘　善光・奈良正義1984「最花南遺跡第2次調査報告」『むつ市文化財調査報告』10 橘　善光・奈良正義・星　和夫1985「最花南遺跡第1次調査報告」『むつ市文化財調査報告』11 むつ市教委1986『最花貝塚発掘調査報告書(第4次)』 八戸市博物館1988『図録-青森県の貝塚』
田名部館跡	たなぶたて	むつ市	むつ市小川町二丁目	41.1730	141.1300	41.1740	141.1247	早期、円筒上層c式、後期	△	△	○			○			△	△	△				土坑、集石遺構、焼土遺構、ピット		青森県教委1997『田名部館跡』
斗南丘(3)	となみがおか(3)	むつ市	むつ市田名部字斗南丘.三本松.上道			41.1750	141.1435	中期前半、後期初頭						△	△		○						なし		
梨の木平	なしのきだいら	むつ市	むつ市並川町			41.1712	141.0942																		むつ市教委1986『梨ノ木平遺跡発掘調査報告』 むつ市教委1988『梨ノ木平遺跡第2次発掘調査報告』 むつ市教委1990『梨ノ木平遺跡第3次発掘調査報告』 むつ市教委1990『むつ市文化財調査報告16』

表１　円筒土器データベース作成の一例

円筒土器文化総合研究　文献データ

ちょしゃ	著者	年	論文タイトル	出典	頁	キーワード
あいはらじゅんいち	相原淳一	1989	「宮城県・山形県における早期から前期初頭にかけての土器編年について」	『第4回　縄文文化検討会シンポジウム　　東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』		
あおのともや	青野友哉	2003	「北海道伊達市北黄金2遺跡採集の大木式土器について」	『北海道考古学』39	pp.83-90	
あおもりこうとうがっこうしゃかいけんきゅうぶ	青森高等学校社会研究部	1949	「青森市古代遺跡について」	『郷土』2(青森高等学校社会研究部誌)		
あかいししんぞう	赤石慎三	2004	「石狩低地帯南部における縄文時代中期後葉の土器」	『第2回　東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題－資料集－』	pp.1-20	柏木川式、ノダップⅡ式、煉瓦台式、余市式
あかぬまひでお	赤沼英男	2002	「三内丸山遺跡における赤色塗彩材料の使用状況について」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』5	pp.36-41	
あかぬまひでお	赤沼英男	2003	「三内丸山遺跡における色材料の製作と使用に関する研究」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』6	pp.43-49	
あかぬまひでお	赤沼英男	2004	「円筒土器文化園における石器ならびに土器表面加工技術に関する研究－三内丸山遺跡および周辺遺跡を中心として－」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』7	pp.65-71	
あかぬまひでお	赤沼英男	2006	「出土資料の組成からみた三内丸山遺跡縄文時代中期における塗装技術の流入と展開	『特別史跡三内丸山遺跡年報』9	pp.62-69	
あべかつのり	阿部勝則	2004	「縄文時代中期の三角形壔土製品・三角壔形石製品について 一岩手県内出土事例の検討-」	『紀要』ＸＸⅢ((財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)	pp.23-40	
あべぎへい	阿部義平	2002	「縄文時代の道と記念墓列の研究」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』5	pp.42-46	
あべちはる	阿部千春	1993	「北海道南部における初期の円筒土器とその周辺 －円筒土器下層式a・bの再検討と石器の組成を中心として	『考古学ジャーナル』362	pp.16-24	
あべちはる	阿部千春	1995	「ハマナス野遺跡における祭祀要素 －円筒下層期の環状集落における精神的な遺物および遺構の事例報告	『北海道考古学』31	pp.117-123	
あべちはる	阿部千春	2004	「大船遺跡出土の大安在B式土器」	『第2回　東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題－資料集－』	pp.21-36	大安在B式
あべちはる	阿部千春	2010	「道南の盛土遺構　－亀田半島の事例から－」	『三内丸山遺跡などの盛土遺構の研究　予稿集』	pp.62-71	
あべよしろう	阿部芳郎	1995	「土器焼きの火・料理の火－縄文土器にみられる使用痕跡と器体の劣化構成－	『考古学研究』42-3		
あんざいまさひと	安斎正人	2007	「円筒下層式土器期の社会　－縄紋時代の退役狩猟者層－」	『縄紋時代の社会考古学』		
あんざいまさひと	安斎正人	2010	「円筒下層式土器期の構造変動」	『研究紀要』9(東北芸術工科大学東北文化研究セン	pp.3-19	円筒土器文化
あんそひょん・つじせいいちろう・くにきだだい・よしだくにお	安昭炫・辻誠一郎・國木田大・吉田邦夫	2008	「青森県、津軽西海岸における旧期クロスナ層とトチノキ林の形成」	『環境文化史研究』1	pp.47-54	トチノキ
いしおかのりお	石岡憲雄	1975	「円筒土器下層式について　－近年の動向から－」	『遮光器』9	pp.20-33	円筒下層式
いしおかのりお	石岡憲雄	1999	「東北地方前期(円筒下層式)」	『縄文時代』10	pp.118-127	円筒下層式
いしかわりゅうじ	石川隆二	2003	「DNA考古学による三内丸山縄文農耕の検証」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』6	pp.50-54	
いしかわりゅうじ	石川隆二	2004	「DNA考古学による縄文植生の再生」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』7	pp.78-82	
いしかわりゅうじ・さとうよういちろう・Steven Weber・わんうぇい・たんりょ	石川隆二・佐藤洋一郎・Steven Weber・王巍・湯陵華	2008	「三内丸山遺跡北の谷出土植物遺体による縄文環境と植物利用の解析」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』11	pp.40-46	
いしまるえりこ	石丸恵利子	2011	「三内丸山遺跡および東道ノ上(3)遺跡出土魚類と哺乳類の炭素・窒素同位体分析」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』14	pp.21-26	
いしもとしょうぞう・すがわらたけふみ	石本省三・菅原健史	1968	「紅葉山砂丘における続縄文期の遺跡」	『昭和43年度第二回北海道高等学校郷土研究大会発表資料』	pp.63-66	
いちかわかねまる	市川金丸	1979	「東北北部縄文中期の竪穴住居跡」	『考古学ジャーナル』170		
いちかわかねまる	市川金丸	1983	「三戸郡倉石村駒袋遺跡出土の円筒下層式土器」	『遺址』3	pp.3-10	
いちかわかねまる	市川金丸	2006	「東北地方北部の円筒式・大木式土器編年と十和田中掫テフラ(To-Cu)について」	『植生史研究』特別2	pp.139-149	十和田中掫テフラ
いちかわかねまる	市川金丸	2006	「ヒスイ航海と遠隔交流交易(1) －三内丸山から糸魚川原産地への航路の予察－」	『青森県考古学』14	pp.3-8	
いとうゆみこ	伊藤由美子	1997	「第6鉄塔地区の土壌分析について」	『史跡三内丸山遺跡年報』1	pp.19-24	
いとうゆみこ	伊藤由美子	2007	「円筒土器文化の植物遺体」	『平成19年度　青森県考古学会　研究発表会「円筒土器文化の諸問題」』	当日配布資料	
いとうゆみこ	伊藤由美子	2011	「青森県青森市三内丸山(9)遺跡におけるトチノキ利用について」	『青森県立郷土館研究紀要』35	pp.43-50	
いとうりゅうぞう・やまもりのぶまさ	伊藤隆三・山森伸正	1989	「富山県小矢部市桜町遺跡(舟岡地区)の発掘調査」	『縄文時代の木の文化』富山県考古学学会縄文時代研究グループ		
いなのゆうすけ	稲野裕介	1993	「円筒土器に伴う岩偶(1) －形態と大きさについて－」	『考古学ジャーナル』362	pp.25-29	
いなのゆうすけ	稲野裕介	1997	「円筒土器に伴う岩偶(2)」	『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(1)』		
いなのゆうすけ	稲野裕介	1999	「遺物研究　岩偶」	『縄文時代』10	pp.139-146	
いなのゆうすけ	稲野裕介	1999	「円筒土器に伴う岩偶(3) －分布の南辺における肩パッド型岩偶の様相－」	『北上市立埋蔵文化財センター紀要』1	pp.1-10	岩偶
いなのゆうすけ	稲野裕介	2002	「円筒土器に伴う岩偶(4) －前期大木式土器圏の岩偶とその伴出遺物－」	『北上市立埋蔵文化財センター紀要』2	pp.1-8	岩偶
いなのゆうすけ	稲野裕介	2004	「岩版と岩偶の「岩」の用字について」	『時空をこえた対話－三田の考古学-』	pp.97-102	
いなのゆうすけ	稲野祐介	2005	「円筒土器に伴う岩偶－三内丸山遺跡の資料を中心に－」	『時空をこえた対話－三田の考古学-』	pp.71-75	
いなのゆうすけ	稲野祐介	2006	「三内丸山遺跡出土の岩偶－報告書の見解に関する意見－」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』9	pp.20-21	
いまむらけいじ	今村啓爾	2006	「縄文前期末における北陸集団の北上と土器系統の動き(上)」	『考古学雑誌』90-3	pp.1-43	前期末、北陸系、異系統土器
いまむらけいじ	今村啓爾	2006	「縄文前期末における北陸集団の北上と土器系統の動き(下)」	『考古学雑誌』90-4	pp.36-53	前期末、北陸系、異系統土器
いまむらみねお	今村峰雄	2002	「三内丸山遺跡のクリ材の年代測定結果について」	『特別史跡三内丸山遺跡年報』5	pp.15-17	
いわたやすゆき	岩田安之	2007	「縄文時代における集落構造の一端を探る」	『平成19年度　青森県考古学会　研究発表会「円筒土器文化の諸問題」』	pp.13-20	
いわたやすゆき	岩田安之	2011	「頻度のセリエーション、系統のセリエーション、流行のタイムラグ　－青森県縄文時代前期後半期における土器の分析－」	『考古学と陶磁史学　－佐々木達夫先生退職記念論文集－』	pp.200-218	土器、型式学、系統、様式

表２　書誌一覧作成の一例

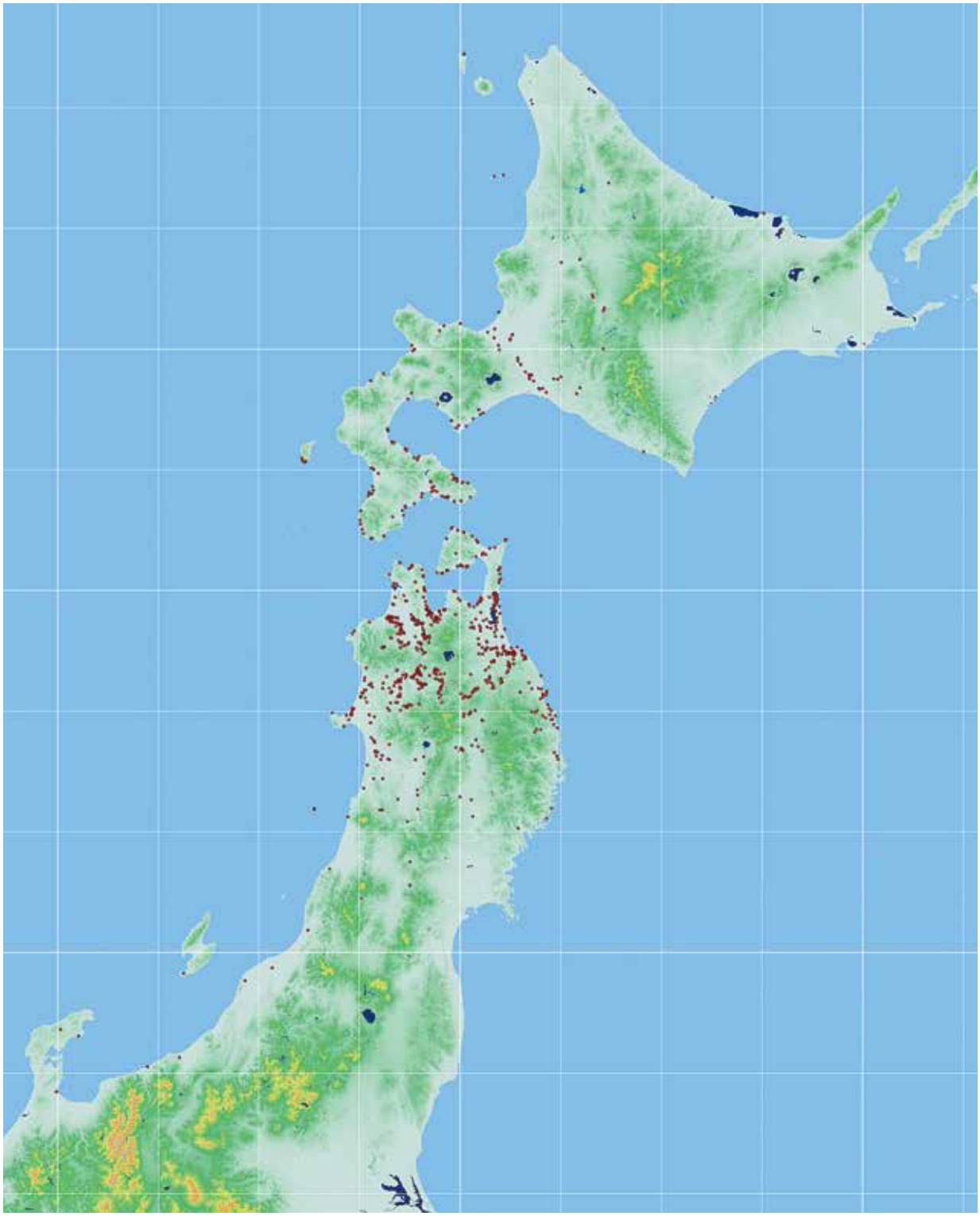

図１　円筒土器出土遺跡図

４．成果と活用

（１）データベースの作成

三内丸山遺跡と同時代の縄文遺跡の比較・検討を行い、新たな情報発信に繋げるため、「円筒土器文化データベース」を３年に渡り作成した。

基礎的情報（遺跡名（読み）、遺跡の所在地、緯度/経度、立地、標高、地形区分、発掘調査面積、出土土器型式、時期）に加え、集落情報（検出遺構の種別と数、特定の遺物の出土の有無と数）の抽出・入力を進めた。

集落研究の中心となる竪穴建物跡については、青森県内の遺跡から詳細情報（遺跡名、遺構番号、時期及び土器型式期、長軸長、短軸長、壁高、主柱数、炉の形態、付帯施設等）の抽出・入力を行った。

さらに、円筒土器文化の集落構造を把握するために、竪穴建物跡の検出が５棟以上である遺跡について、遺構配置図の画像データを作成した。

これらの更なる充実により、円筒土器出土遺跡の基礎情報・集落情報の把握が容易になり、集落研究の進展に繋がると考えられる。

（２）円筒土器出土遺跡の確認と関連書誌一覧の作成

円筒土器文化研究の基礎となる各種文献を悉皆的に調査する中で、円筒土器出土の有無を確認し、書誌一覧の作成を行った。

青森県文化財保護課所蔵の文献の他、青森県埋蔵文化財調査センター所蔵、プロジェクトメンバー所蔵文献を中心に書誌を作成した。明らかに円筒土器が出土している遺跡にも関わらず、上記の範囲で入手できないものは、他機関より入手し書誌作成を行ったものもある。

その結果、平成14年刊行の『青森県史　別編三内丸山遺跡』で村越潔氏が確認した円筒土器出土遺跡が257遺跡（円筒下層式土器207遺跡、円筒上層式土器146遺跡）から、平成26年度末には1,117遺跡（円筒下層式土器697遺跡、円筒上層式土器618遺跡）へと４倍強の遺跡数となった。

（３）広域編年案の作成

円筒土器文化は南北約350kmに及ぶ広大な範囲に広がった文化であり、北海道南部・青森県全域・岩手県北半・秋田県北半を中心とした。青森県を除く北海道・岩手県・秋田県では、円筒土器とは異なる土器型式が、円筒土器文化圏に隣接して分布している。

研究の進展には、各地の土器型式の時間関係の共通認識が不可欠であることから、平成24年度のデータベース作成検討会の当初より、プロジェクトチームメンバーと共に、議論と検討を重ね、北海道・北東北地方における当該期の編年案の作成を進めてきた。

円筒土器文化の中心である青森県においては円筒下層諸型式、円筒上層諸型式が研究の初期より概ね用いられてきた。一方、北海道においてはサイベ沢諸型式が設定されている。また、各地域において設定された所謂地方型式が存在するが、その型式内容をあらためて確認・再検討し、現代的にはどのように評価すべきものであるかも議論した。

このようにして作成した平成26年度の編年案が表３である。概ねこれまでの編年観に沿ったものであるが、地方型式を含めた多型式間の時間関係を明確にし、大木諸型式との関係も整理された。

（４）各遺物の出土分布の把握

データベースを利用して、円筒土器文化に特徴的とされる遺物の出土遺跡・出土数・時期を確認し、その分布範囲を把握することが可能となった。

半円状扁平打製石器、北海道式石冠についてその事例を提示する。

円筒土器文化データベース土器編年案

		岩手・秋田	青森		北海道	
					道南	道央
前期	前葉	大木１	早稲田6	表館	芦野1群	石川野	綱文
		大木2a		深郷田		春日町（椴法華）	静内中野（トビノ）
		大木2b	白座		芦野2群	大津３群	加茂川（静内中野）
	中葉	大木３	茂屋下岱	円筒下層a		椴川	柳館遺跡・上花畔1遺跡A地区
		大木４		円筒下層ｂ		サイベ沢Ⅰ	植苗
		大木5a					
	後葉	大木5b	円筒下層c			サイベ沢Ⅱ（森川）	
		大木６（古）	吹浦	円筒下層d1		サイベ沢Ⅲ	大麻Ⅴ
		糠塚 大木６（新）	狐岱	円筒下層d2			フゴッペ貝塚１
中期	前葉	大木7a		円筒上層a1		古武井	フゴッペ貝塚２
		大木7b		円筒上層a2			フゴッペ貝塚３
				円筒上層b		サイベ沢Ⅴ	オサツ
				円筒上層c		サイベ沢Ⅵ	手稲前田・厚真１
	中葉	大木8a	萱刈沢b3類	円筒上層d	泉山	サイベ沢Ⅶa	萩ヶ岡１
				円筒上層e	榎林Ⅰ	サイベ沢Ⅶb	萩ヶ岡２
	後葉	大木8b		榎林		見晴町	天神山（萩ヶ岡３）
		大木9a		最花	中の平3	大安在Ｂ	柏木川（萩ヶ岡４）
		大木9b				ノダップⅡ	北筒（トコロ６類）
		大木10	大木10併行		大曲	煉瓦台（静狩）	

表3　北海道・北東北の円筒土器型式期の広域編年案

図２　平成24年度第１回円筒土器データベース作成検討会の様子

【半円状扁平打製石器】

円筒土器文化に特有の遺物として捉えられるものに、半円状扁平打製石器がある。

円筒土器データベースを利用して、その分布を確認した（図３）。

北は北海道石狩低地帯から、南は太平洋側では北上川中流域の北上盆地、日本海側では雄物川中流域の大仙市まで分布が確認されている。

北海道は円筒土器の主要分布の北限とされる石狩低地帯には僅かに存在がみられる程度であるが、噴火湾西岸から津軽海峡に面した地域には出土が多い。青森県では全域でみられるが、岩手・秋田両県では円筒土器文化圏を越えて、大木式土器文化圏まで分布している。

円筒土器文化圏と大木式土器文化園との境界の目安として一般に用いられる北緯40°ラインよりも60～70km南まで面的に分布しており、円筒土器文化圏に色濃い分布を示すものの、必ずしも円筒土器文化圏に限った分布を示す遺物ではないことがわかる。

図３　半円状扁平打製石器の分布

【北海道式石冠】

北海道式石冠も円筒土器文化期にみられる遺物である。

円筒土器データベースを利用して、その分布を確認した（図４）。

北は北海道の石狩低地帯を越え、沙流川流域・上川盆地まで及び、石狩低地帯での出土も多い。南は青森県域の出土が多いが、岩手・秋田両県にはあまり出土例が多くみられない。

半円状扁平打製石器とは異なりやや北に分布が寄っている。

図４　北海道式石冠の分布

半円状扁平打製石器と北海道式石冠の２例を提示したが、他の遺物でも同様に円筒土器データベースを用いて、分布を把握することは可能である。

さらに、時期別の詳細な分布を図化することで、岩偶や青竜刀形石器など、特定遺物の分布の変遷が把握できるであろう。

（５）円筒土器の出土分布の変遷

北海道・北東北における時期ごとの円筒土器出土遺跡数及び分布を図化した。

円筒土器文化成立期より主要な分布圏は不変である。縄文時代前期後葉に遺跡数はピークに達し、中期中葉にはピーク時の半減となる。

【縄文時代前期中葉】（図５）

円筒土器文化の成立期である。分布図を見ると、北海道石狩低地帯ではやや数が少ない。青森県全域、岩手県の馬渕川・新井田川流域以北、秋田県の米代川流域以北の北緯40°ラインより北には濃密な分布が確認されている。円筒土器文化の成立間もないこの時期には既に、円筒土器の主要分布圏は確立されていたといえる。

図５　円筒土器出土分布図（縄文時代前期中葉）

【縄文時代前期後葉】（図６）

円筒土器出土遺跡の増加期である。前段階の分布の全域において、遺跡が増加して、密な分布状況を示している。また、秋田県中南部の雄物川・子吉川流域にも新たに分布が広がっており、主要分布圏以外にも広がりをみせる時期である。

遺跡数は前段階比176％と大幅に増加し、北海道では積丹半島の南西側海岸域や噴火湾北岸域にも出土が確認されている。岩手県においては、主要分布圏が馬渕川・北上川の分水嶺を越える。北三陸地方においても円筒土器が大木式土器に比して多い割合を示す時期であり、太平洋側において主要分布圏がやや南進した時期と捉えられる。

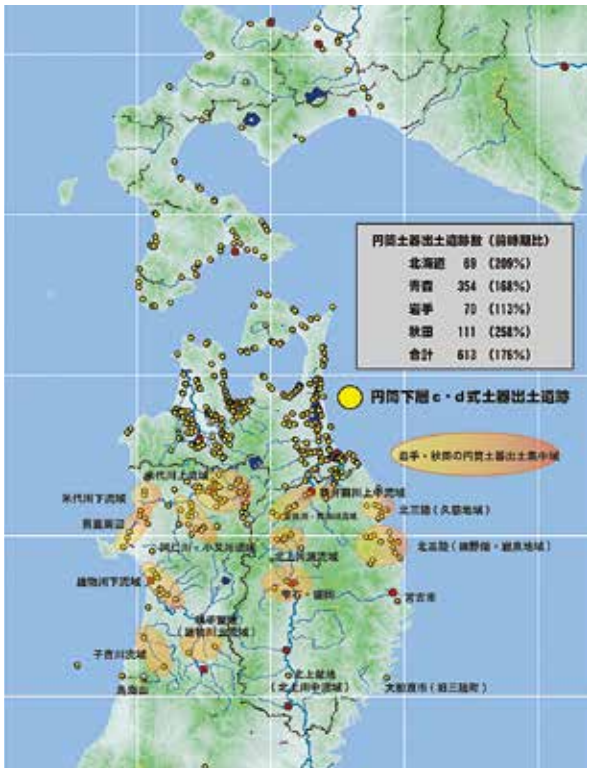

図６　円筒土器出土分布図（縄文時代前期後葉）

【縄文時代中期前葉】（図７）

円筒土器出土遺跡の安定期である。前段階よりやや減少（約80％）するが、遺跡数は依然多い。

全域において遺跡密度はやや下がるが、分布圏も前段階とあまり変わらない。岩手県の南三陸地方においてやや出土の増加がみられる。

縄文時代前期後葉の遺跡増加期と縄文時代中期中葉の遺跡集約期の間を占める時期であり、その中間的様相を示す時期といえよう。

【縄文時代中期中葉】（図８）

円筒土器出土遺跡の集約期である。前段階より

大幅な減少を示し（約63％）、前期後葉に比して約51％と半減している。

図７　円筒土器出土分布図（縄文時代中期前葉）

図８　円筒土器出土分布図（縄文時代中期中葉）

後述するが、この遺跡数の減少は円筒土器文化最終段階における集落の集約と拡大を示す可能性がある。

周縁部の分布にも変化がみられ、秋田県中南部の雄物川・子吉川流域では出土がない。秋田県の米代川流域、岩手県の馬渕川・北上川分水嶺付近、北三陸地域で大木８a式土器との共伴例が増加し、大木式土器文化の影響が顕在化し始める時期である。

（６）特定地域における円筒土器文化期の遺跡動態

個々の遺跡面積の発掘率により左右されるデータではあるが、竪穴建物跡の時期ごとの検出数は、集落規模を想定する上で目安となるものである。

ここではデータベースを活用し、円筒土器出土遺跡の調査事例が多い青森市域と八戸市域の２地域を対象に、竪穴建物跡検出数の推移を図化した。

陸奥湾に面した青森平野と馬渕川・新井田川という大河川の下流域に開けた八戸平野は、それぞれ概ね青森市域、八戸市域と重なるが、円筒土器文化期の集落推移では、興味深いデータを示した。

ここでは、検出された竪穴建物数を用いて、仮に小規模集落（１～20棟）、中規模集落（21～40棟）、大規模集落（41棟以上）と分類し、論を進める。

①青森市域

【縄文時代前期中葉】（図９ 左上）

青森平野西部の沖館川流域に小中規模集落の集中が見られる。平野東部、南部は遺跡数も少なめで、検出されている竪穴建物数も少数である。

【縄文時代前期後葉】（図９ 右上）

西部の沖館川流域での遺跡集中は継続してみられるが、新たに東部と南部で遺跡数が増加し、中規模集落が確認される。沖館川の上流域においても比較的竪穴建物数の検出数が多い遺跡がある。一方、中規模集落が拡散し、それまでの沖館川流域における一極集中の解消傾向がみられる時期と

いえよう。その中で、三内丸山遺跡での竪穴建物検出数は順調に増加傾向を示している。

【縄文時代中期前葉】(図９ 左下)

西部では三内丸山遺跡で34棟が検出されており、その周辺域には竪穴建物跡が極少数検出された遺跡が多数存在する。沖館川上流域の遺跡もみられなくなる。

東部や南部では遺跡数はあまり減少しないが、１～２棟検出程度の小規模集落しかない。

西部の三内丸山遺跡では順調に竪穴建物数が増加しており、沖館川流域の遺跡が中流域にある三内丸山遺跡とその周辺への集中傾向を示している。

【縄文時代中期中葉】(図９ 右下)

全体に遺跡数が減少している。東部で数棟程度の集落は認められるが、南部と共に目立つ遺跡はない。

一方、三内丸山遺跡が100棟を超す大規模集落となり、さらにその周辺に小・中・大規模の集落が集中していることが明らかである。当該期は三内丸山遺跡の集落範囲が最も広大になった時期であり、この地域においては集落の集約化と大規模化が進んだ時期と考えられよう。

②八戸市域

【縄文時代前期中葉】(図10 左上)

新井田川上流域において、中規模の集落が検出されているが、下流域では数棟程度の小規模集落がみられるのみである。

【縄文時代前期後葉】(図10 右上)

新井田川上流域には小規模集落が引き続き残るが、下流域においても検出竪穴建物数10棟を超える集落がみられるようになる。

【縄文時代中期前葉】(図10 左下)

この段階には八戸市域北側の五戸川流域に突如中規模集落笹ノ沢（３）遺跡が現れる。これは翌時期には終息へ向かう比較的存続期間の短い集落であるが、施設が列状に配置される集落構造をなす拠点集落と考えられるものである。

一方、新井田川流域では前段階に上流域・下流域でみられた比較的竪穴建物の検出数が多い集落が姿を消し、中流域の松ヶ崎遺跡周辺への遺跡集中傾向をみせ始める。次段階で多くの竪穴建物が検出される松ヶ崎遺跡であるが、この段階では依然数棟規模の検出に止まっている。

【縄文時代中期中葉】(図10 右下)

全域で遺跡数が減少している。新井田川中流域の松ヶ崎遺跡で31棟が検出されており、その周辺に遺跡が集中する傾向がみられる。

「青森市域・八戸市域の集落変遷」

青森市域では青森平野西部の沖館川流域と東部・南部の３地域に、主に当該期の集落跡がみられる。

西部の沖館川流域への集落集中は円筒土器文化期を通して継続的であるが、中期になると上流域の遺跡も僅かとなり、中流域の三内丸山遺跡周辺へ集中している。

南部・東部では遺跡数が増加した前期後葉には、中規模集落が現れる。しかし、中期に入るとそれらは姿を消し、中期中葉には平野の多くの集落が三内丸山遺跡周辺に集約したような印象を受け、平野西部への一極集中の様相を呈する。

円筒土器文化期の拠点集落と評価される三内丸山遺跡であるが、集落成立期より一貫して青森平野における中心集落であり、大規模集落化した中期中葉に更に顕在化している。

一方、八戸市域では三内丸山遺跡のような継続性を有する拠点集落の姿は今のところみえない。時期によって、小中規模集落が新井田川上流域（前期中葉）→新井田川上・下流域（前期後葉）→新井田川中流域・五戸川流域（中期前葉）→新井田川中流域（中期中葉）と転々と移動している印象を受ける。

八戸地域から馬渕川・新井田川流域及び北三陸地方に視点を移すと、三内丸山遺跡同様に継続的

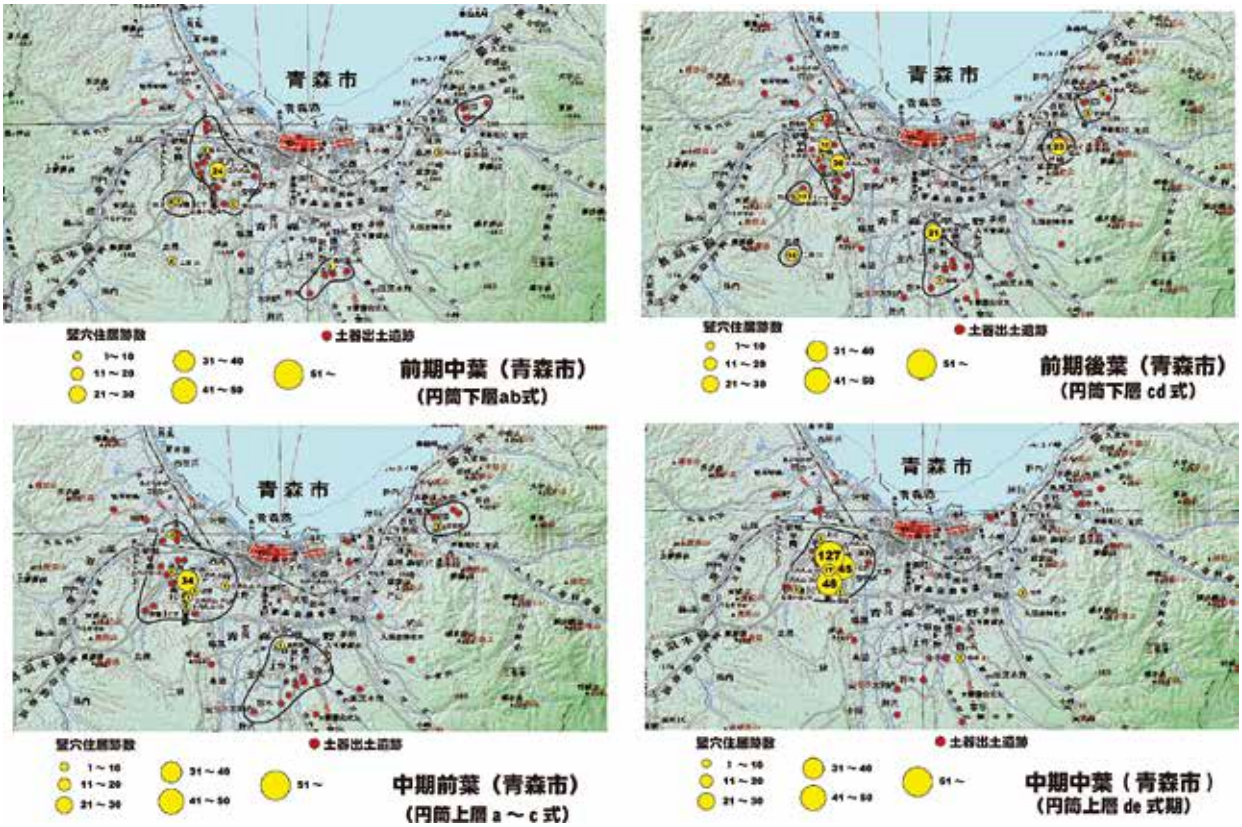

図９　青森市の円筒土器文化期の竪穴建物検出数

な拠点集落が、岩手県普代村力持遺跡にみられる。このように地域によって中心となる集落が継続性を有するものであるかは、さらに他地域の状況も調査する必要があり、八戸地域でも更なる調査の進展により、同様の遺跡の存在が判明する可能性もあろう。

５．今後の円筒土器文化データベース

平成24～26年度の３年にわたって、円筒土器文化データベースの作成に取り組んだ。

確認された円筒土器出土遺跡の大幅な増加や円筒土器文化に特徴的とされた遺物の出土分布、地域による集落変遷の把握など、その活用法と可能性は大きく広がる。

この成果は報告書として正式に公開されるものであるが、調査の進行と共に新たにデータベースは更新され続けるべきものである。

青森県は円筒土器文化圏の中心である。青森県のほぼ中央に位置する青森平野は円筒土器文化圏の中央であり、その中に位置する拠点集落三内丸山遺跡は円筒土器文化の中心集落でもある。

その保存活用にあたる青森県は、円筒土器文化の実像を明らかにし、伝え続ける必要がある。

平成27年度には、三内丸山遺跡第２回企画展「円筒土器文化を探る―データベースの分析から」を開催し、ここまでの成果を公表した。

今後、新たな円筒土器出土遺跡の基礎データの追加作業に加え、過去の発掘調査例の詳細な集落データの充実が研究の進展には不可欠であり、定期的な更新・公開が求められよう。

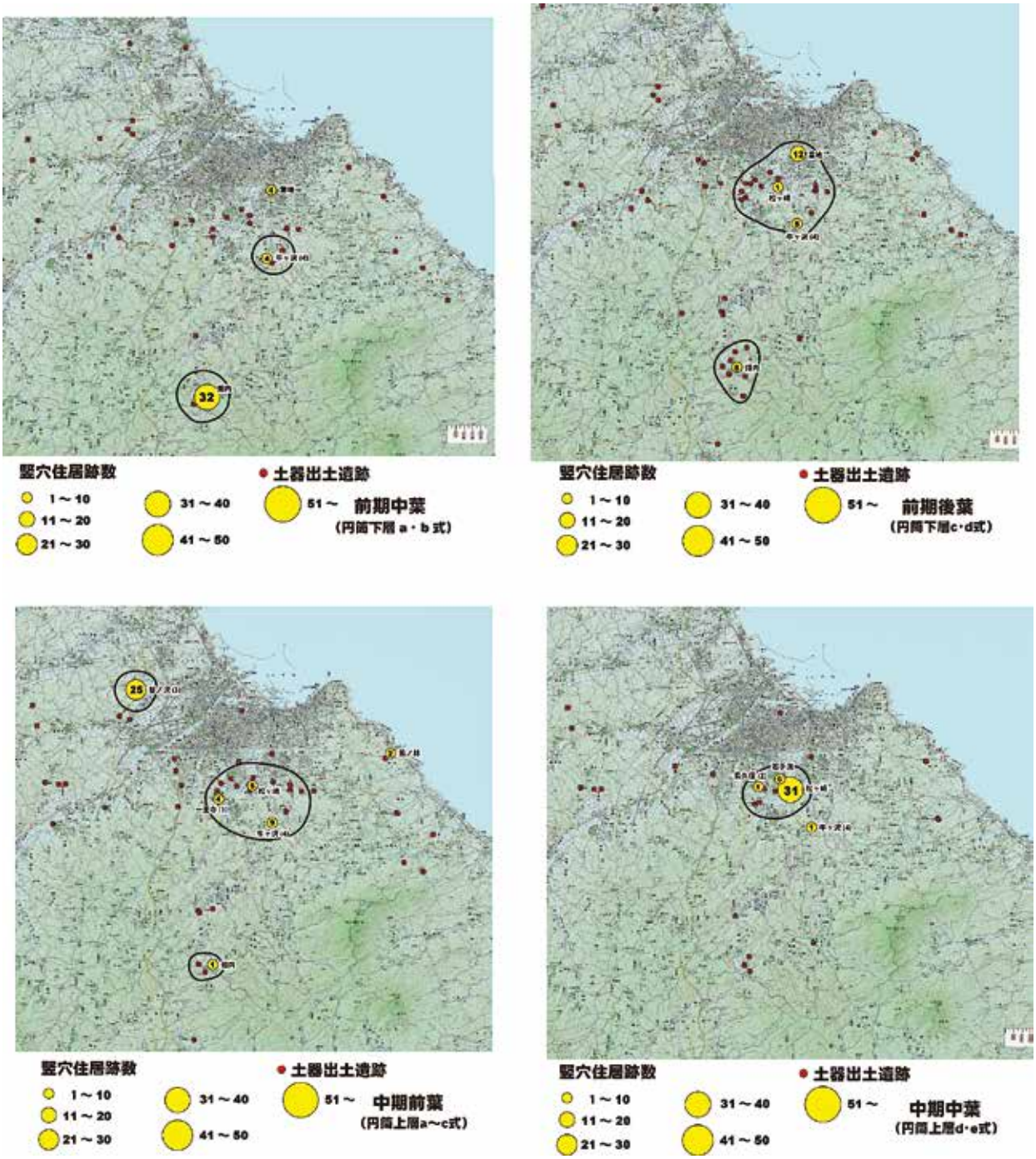

図10　八戸市の円筒土器文化期の竪穴建物検出数

円筒土器データベース作成検討会

事務局より作業状況の報告

プロジェクターを用いた発表の後、議論

ＰＴ員　小林克氏による発言

ＰＴ員　福田裕二氏による発言

ＰＴ員　星雅之氏による発言

ＰＴ員　嶋影壮憲氏による発言

ＰＴ員　藤原秀樹氏による発言

図11　平成24～26年度の円筒土器データベース作成検討会の様子